それぞれの季節

みゆ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
それぞれの季節

【Ｎコード】
Ｎ４４５４Ｄ

【作者名】
みゆ

【あらすじ】
歳もシチュエーションも違う主人公達の恋を、季節をテーマに書いていきます。冬から始まり、秋で完結の予定です。

雪

朝目を覚ましたら、昨夜と同じように頭がとても重かった。一昨日からひいている風邪はまだ良くなっていないみたいだ。
「具合はどう？」
お母さんが部屋に入ってきて私のおでこに手を当てる。
「頭重い…。」
「まだ熱が下がらないわね。もう一日学校休みなさい。」
「…うん。」
お母さんは学校に電話をする為に部屋から出ようとしたが、ドアを開けたところで振り向き
「早く治しなさい。今の学校行かれるのも後少しなんだから。」
と言った。

お母さんが出ていくのを見届けた後、私は重い身体をゆっくり起こして近くにあった半纏を羽織り、カーテンを開けた。
雪が降っている。
私しかいない部屋に、静かに雪の降り積もる音が聞こえる。

この降り積もった雪が溶けるころには、私はきっとこの街にいないだろう。
春になってもなかなか溶けない、壁のように積もった雪を見るのもあと少し。
もうすぐ私はお父さんの仕事の都合で、ここからずっと南の方にある、きっとあまり雪の降らないであろう町に引っ越しをする。

「寒っ。」

急に寒さに気が付いて布団に戻ろうとした時、
ゴン
という鈍い音と一緒に窓ガラスに何かが当たった。
雪玉？
再び窓際に戻り雪の積もった地面を見下ろすと、学生服をきた男の子がこっちを見上げて立っていた。
「…西藤くん？」
窓を開ける。
凍えるような冷たい風が吹き込んできて、思わず身震いする。
「風邪治ったかあ？」
ブーツの半分が雪に埋もれながらも立っているその男の子は、大きな声で問いかけてきた。
私は、喉が痛くて大きな声が出せない変わりに、頭がクラクラしながらも首を大きく横に振った。
彼は、少し残念そうな顔をしながらこっちを見上げている。学生服の上に着ているベージュのコートがどんどん白くなっていく。
「風邪ひいちゃうよ。」
私は出来る限り大きな声を出して、彼に言った。
「大丈夫だよ。」
彼は笑い
「早く風邪治して学校こいよな。」
そう言ってゆっくりと歩きだした。

「何やってるの！」
気が付くとお母さんがお盆を持って、部屋の入り口に立っていた。
「早く窓閉めなさい！風邪が悪くなったらどうするの！？」
怒ったような表情に気圧されて、私は窓を閉めた。

お母さんはつかつかと部屋の中に入ってきて、私の目の前に座ってお盆を置いた。お盆の上には、温かそうに湯気を上げているお粥が乗っている。
「これ食べて薬飲んで寝なさい。」
「…はい。」
首を小さく下に動かして、お粥の入ったお茶碗を持ち上げる。
「…お父さんは？」
いつもならこの時間はまだ家にいるはずのお父さんが少し気になり、尋ねてみた。
「もう会社に行ったわよ。今日は雪だから、いつもより早く出掛けたのよ。」
なんとなく嫌そうな表情をして、お母さんが立ち上がる。
「お母さんもこれから外の雪かきに行ってくるから、あんたはおとなしくねてなさいよ。」
面倒臭そうに部屋から出ていくお母さんの後ろ姿を見送って、私はお粥を食べ始めた。

お母さんは、雪、嫌いなのかな。
じゃあ、あまり雪が降らない、新しい町に行くの嬉しいのかな…。
私は、本当は、この町でずっと雪を見ていたい。来年も、再来年も、ずっと。
学校の友達とも、離れたくない。
西藤君とも。
もっとずっと一緒にいたい。
でも…。
どうにもならないってわかってるから、何も言わない。

明日は絶対学校に行こう。

私はお粥を食べきり、お盆の隅に置いてあった苦い薬を頑張って飲んで、布団に潜り込んだ。

桜

お互いの夢を叶える為、三年間ずっと一緒にいた私達は、それぞれ違う土地に移り住んだ。

春。

大学の入学式も無事終わり、少しは友達も出来た。
高校とは全然違うこの華やいだ空間は、暖かな陽気のせいもあってか、妙な盛り上がりを見せている。

サークルの勧誘だの、お花見だのといった様々な誘いを断わり、私は、ほんの少し前に住み始めたばかりのアパートの近くにある小さな公園へ、一人向かった。それほど人通りの多くないこの街の公園には、子供連れのお母さんや老夫婦が多く、お花見の時期とは思えない程、ゆったりとした時間が流れていた。
風が吹く度に満開の桜から花びらが散り、子供達の歓声があがる。

ふと、彼と一緒に桜を見に行ったことを思い出した。
『桜の花には香りがないんだよ』
あの時、嘘か本当かわからない雑学を口にした彼は、今隣にはいない。

急にに淋しさが募り、涙がこぼれた。
誰にも気付かれないように公園の隅に行き、背を向ける。
周りの喧騒や子供達の笑い声が、今はなんだか切ない。

私は涙を拭い、桜の木の下に立った。
年に一度しか見られないこの花は、目を逸らさせまいとするかのように、青空を背に美しく咲き誇っている。

彼も今同じように、桜の花を見ているだろうか。

バックから携帯電話を取出し、桜に向ける。何回か撮影した内の一番綺麗な画像を、遠く離れた街にいる彼に送信した。
―そっちにもまだ桜は咲いていますか？―

海

夏休みがきた。
正直暑いのはきらい。泳ぐのは苦手。
でも、付き合って一ヶ月の彼の
「海へ行こう」
という猛アピールを断わりきれなかった。

海。
私にはあまり縁のなかった場所。
浜辺は照り返す太陽で普段以上に暑く、その暑さを凌ぐ為に大勢の人が続々と海に入っていく。
「とりあえず着替えようか。」
彼に言われて、私達は海の家に向かった。
ここも凄い人で、十分程順番待ちをしてようやく更衣室に入ることが出来た。
毎晩苦手なストレッチをしていた成果がでて、たるんでいたお腹も、少しは引き締まった。そして友達に付き合って貰って選んだ可愛くてちょっとセクシーなこの水着。
彼は『可愛い』って言ってくれるだろうか。

更衣室から出て、ドキドキしながら彼に近寄ると、彼は
「じゃあ、行こうか。」
と言って、海に向かって歩きだした。
水着姿の私には、何の反応もなし。少しがっかりしながら彼の後を歩いた。

すぐにでも海に入りたそうな彼。
パラソルに隠れる私。

「泳ぐの苦手だから」
と、不服そうな彼を送り出して、一人ビーチに座る。
泳ぎの得意な彼は、あっという間に沖の方に行ってしまった。私は彼を目で追いながら、ひたすら暑さに耐えていた。
夏の日射しが容赦なく照りつけ、日陰に入っていても全く涼しさを感じない。

来なければよかった。

なんとしてでも彼を説得して、映画とかカフェとか、クーラーの効いている涼しい所に行けば良かった。

何か冷たいものを買いに行こうとしたとき
「一人なの？」
と、知らない男が馴々しく近寄ってきた。
「一人じゃ暇でしょ。あっちで一緒に遊ばない？」
男は仲間がいるらしき方向を指差したが、私は見向きもせず海の家に向かう。
「何か買いに行くの？俺が買ってあげるよ。」
無視しているのに、なんでこうしつこく付いてくるのか。
「自分で買うからいいです。」
「そんな遠慮しなくていいって。」
別に遠慮している訳ではない。うざい。どこかに行って欲しい。
「ねえ、何が欲しいの？」
いい加減耐えられなくなり、私は
「もう付いてこないでよ！」
と言い放ち、体の向きを変え海に向かって全力で走った。

波際につき、荒くなった息を落ち着かせていると、沖にいた彼が私に気付き戻って来た。

「どうしたの？」
不思議そうに彼が見つめる。
私は、暑いこととか、今走って更に喉が乾いてしまったこととか、沢山不満があったけど、それ以上に、また一人でいて変な男に声を掛けられるのが嫌で、
「一人にしないで。」
と彼に告げた。
彼は一瞬驚いた顔をして、それから少し嬉しそうな表情になり、いきなり私を抱き締めた。

え？なに？？

何が起きたのか解らない。
今度は私が驚く番。
でも、水に濡れた彼の体は、冷たくて心地良い。

「ごめん、一人にして。…淋しかった？」
彼の言葉に、ようやく状況を理解する。
私がナンパが嫌で発した言葉を、彼は私が淋しがって言った言葉だと捉えたのだ。
自分の言ったセリフが急に恥ずかしくなったのと、彼の勘違いが可笑しいのとで、思わず笑いが込み上げてきた。
彼が身体を離して私を見る。
「なんで笑ってるの？」
「ううん、なんでもない。」

ふと周りを見ると、沢山の人。こんな所で抱き締められたなんて…！顔が熱くなる。
「大丈夫だよ。誰も気にしてないって。」
確かにそこら中にいるカップルは、皆イチャイチャしているように

見える。
ようやく冷静を取り戻して、喉が乾いていることを彼に告げた。
二人で海の家に行き、冷たく冷えたラムネを飲む。
「今度こそ一緒に泳ごう。」
「でも、私、泳ぐのあまり得意じゃないから…。」
「大丈夫。」
そう言って、大きな浮き輪を借りてきた彼。
「これがあれば恐くないだろ。」
「でも…。」
「せっかくだから、一緒に泳ごう。」

海の水は、正直綺麗とは言えないけれど、浜辺にいるより数十倍気持ちがいい。
きっと思い切り泳ぎたいだろうに、彼は私が着けた浮き輪をずっと掴んでいてくれる。
「気持ちいいだろ？」
嬉しそうな彼。
「そうだね。」
思ったよりも楽しんでいる私。
「…今更だけど、その水着似合ってるよ。」
「ありがとう。」
照れ笑いする二人。

こういう夏もたまには悪くない。
でも、次のデートは絶対映画に誘おう。

楓〈前編〉

風もいくらか冷たくなり、木々も少しずつ色づき始めた。
日曜日。
俺はいつものように、バイト先から家に通じる道を自転車で走り、途中にある公園に立ち寄る。
辺りを見回すが、あの人はまだ来ていないようだ。
時計を見ると、四時を少し回ったところ。あと十分もすれば来るだろう。
俺はベンチに座り、時間を潰す為に携帯電話を取り出した。

少し前までは、どこにでもあるようなこんな小さな公園に興味を示したことはなかった。
でも夏の暑さも和らいできたあの日、いつもは誰もいない公園に人がいることに気が付いた。長い髪が印象的なその人は、次の週もその次の週も、同じ時間にそこにいた。
何となく彼女が気になった俺は、ある時公園に足を踏み入れた。
彼女はベンチに座って、本を読んでいた。
俺はなるべく彼女に気付かれないようにと少し離れたベンチに座り、彼女を観察し始めた。
少し地味目な服装からして、歳は二十代半ばから後半といったところか。何処かに行ってきた後なのか、横に大きめの荷物が置いてある。
しばらくの間彼女は集中して本を読んでいるようだったが、俺の視線に気付いたらしく、ふと顔上げた。
初めてまともに見た彼女の顔立ちは、想像以上に綺麗で、思わず目が離せなくなる。長いストレートヘアに黒目がちな瞳。正直好みの

タイプかもしれない。二十代後半だなんて、なんて失礼なことを思ったのかという思いも出てきたが、それ以上に、なんでそんな地味な格好をしているのかという気持ちが大きかった。

彼女は俺に気付くと、持っていた本を置き、なぜか慌しくその場を去っていった。

声を掛ける気はなかったがもう少し彼女を見ていたかった俺は、少し残念な気持ちになった。

家に帰ろうと立ち上がった時、彼女が忘れたらしき文庫本に気が付いた。俺はそれを手にし、その次の日曜日、再び公園に立ち寄った。小説と思わしきこの本は、文字だらけで挿し絵など全くなく、こんなことでもなければ俺が手にするなどまずありえない類のものだ。先週と同じように本を読んでいた彼女に、無言でそれを差し出す。その瞬間、彼女の肩がビクッと震えた。そして、恐る恐るといった感じで顔を上げる。

「この前忘れてったでしょ。」

彼女は少し震えた手でそれを受け取り、しおりが挟まっているページを開くと、安堵の表情を浮かべた。どうやら彼女の物で間違いなさそうだ。

とりあえず用事は済んだし、ここにいてもする事はない。今日はこれで帰ろうと彼女に背を向けた時、

「あ、あの…。」

俺を呼び止める小さな声が聞こえた。

振り向くと、何故か彼女は俺から目を逸らし、俯き加減で

「…ありがとうございました。」

とだけ言った。

「別に…。」

目を逸らされたことに不満を感じながらも一応言葉を返して、俺は自転車に乗った。

彼女の態度に不満を抱いたにもかかわらず、その次の週も俺は公園に寄ってしまった。
彼女は俺に気付くと軽く会釈をし、
「この前はありがとうございました。」
と、今度は俺の顔を見て言った。やや目が泳いでいるようにも感じるが、まあよしとしよう。
俺も軽く頭を下げ、少し離れたベンチに座り携帯電話を取り出す。
そして、メールを打つふりをしながら、彼女の様子を伺った。
彼女は凛としていながら温かみがあるような独特の雰囲気をもっている。それは今までに俺が会ったことのある人達の中にはなかったもので…。
言葉を交わす訳でもなくお互い自分の好きなことをしている、それだけなのに、彼女と共有しているこの空間に、俺はいつの間にか心地よさを憶えていた。
それから何度か顔を合わせるうち、日曜日にこの公園で会うのは当たり前の事のようになってきた。挨拶も会釈から言葉を伴うものとなり、多少の会話もするようになっていた。

「こんにちは。」
俺の予想通り、彼女が来たのはあれから十分程経った頃だった。彼女の来る時間は、多少のズレはあるが、四時から四時半の間と決まっている。
「ども」
「大分寒くなってきましたね。」
「そーっすね。」
ほんの一言だけ会話を交わし、彼女はいつもの様にベンチに座り本を開いた。俺も再び携帯をいじり始める。
だがいい加減携帯にも飽きた俺は、本に集中し始めた彼女に声を掛

けた。
「ねえ、そんなに本読んでて飽きない？」
今までの会話で、彼女が“羽田めぐみ”という名前であることと、小さな会社で事務をしている事を知ってる。しかし“さん”付けで名前を呼ぶことに抵抗を感じ、ついつい“ねえ”と呼び掛けてしまう。ちなみに彼女は高校生で年下の俺を“友哉君”と呼ぶ。
「飽きませんよ。色々な種類のお話があって面白いし…。」
俺が年下だと知っても、彼女はいつまで経っても敬語のままだ。
「いい加減敬語やめれば？」
俺の方は会った時からタメ口で、彼女が本当に年上だと知ってもそれは変わらない。
「この話し方に慣れてるから…。」
「ふうん」
彼女が極度の人見知りだということは、少し前に聞いていた。今まで俺に見せた態度もそのせいだと。恐らく彼女の中では、まだ何か俺に一線引いているものがあるのかもしれない。
それを無理に壊したところで何の意味もなく、それどころか今より更に会話が減るような気がして、俺はそれ以上言うのをやめた。
「そんな事より、携帯ばかりいじってて飽きません？」
今度は彼女が俺に問い掛けてきた。
「…まあ」
「良かったらこれ読んでみませんか？」
そういって、彼女は鞄から一冊の本を取り出した。
「でも俺、本とか全然読まねえし。」
「大丈夫。高校生が主人公のお話だから、友哉君も感情移入しやすいと思います。」
彼女があまりにも勧めるので、俺は渋々ベンチから立ち上がり、本を受け取った。
「どうぞ。」
すると彼女はベンチの左側に寄り、俺が座るスペースを作った。俺

は少し戸惑いながらもそれがばれないように、なにも言わず初めてとなる彼女の隣に座った。
彼女からほのかにいい香りが漂う。なにか香水でもつけているのだろうか。妙に意識してしまい彼女の方に顔を向けることができず、横目でちらっと彼女を伺った。
彼女は俺が座ったのを見届けるとまた少し横にずれ、自分が持っていた本に目を移した。
微妙にあいている距離が、なんだかもどかしい。
仕方なく彼女から受け取った本を開いた。小さな文字が書き綴られていて、頭がクラクラしてきそうだ。いくら高校生が主人公の本だといっても、これを読むことは俺にとって相当な苦難だ。
それでもなんとか二、三ページ読み、主人公がどのような状態でいるのかが少し解りかけてきた。しかし…。
「ねえ、これなんて読むの？」
俺は解らない漢字を見つける度、横にいる彼女に聞く。
「で、どういう意味？」
あまりの質問の多さに、とうとう彼女も苦笑いし始めた。
「友哉君って、国語の成績あまり良くないほうでしょう。」
「あまりっつーか…。」
口籠もる俺を見て、再び苦笑い。
「なんだよ。…俺は理数系の人間なんだよ。」
「でも、さすがに少し困りません？」
「別に。」
「今は良くても、これから大学へ進学したり、社会にでた時に、多少の国語力って必要になりますよ。論文書いたりとか、企画書作成したりとか…。今はパソコンや携帯で勝手に漢字を変換してくれるけど、複数の候補があった時に、意味がわからないと選択出来ないじゃないですか。」
言われると、そんなものなのかと思うが、正直将来とか考えてないし、大学に行くか（というより、行けるか）も微妙だ。

黙ってしまった俺を覗き込んで彼女が言ったのは、全く想像もしていなかった言葉だった。
「もし良かったら、教えましょうか？」
正直、勉強なんて面倒だしやりたいとは思わない。学校でも、興味のある授業以外は携帯をいじったり寝ていたりで、真面目に聞いていたことなどほとんどない。日々勉強なんてやらなくても、真面目に授業を受けている奴のノートを、テストの何日か前に見ておけば、赤点を取る程にはならない。
しかし、彼女に言われたことが気にならない訳ではないし、何より、勉強を教わることで彼女ともっと近付くことが出来るのではないか。
そう考えた俺は、彼女の申し出を受けることにした。
「別にやってもいいけど。」
下心を隠す為、思わず生意気な言い方になってしまったが、何故か彼女は嬉しそうに微笑んだ。
「じゃあ決まりですね。折角なので、教科書はその本にしましょう。ちょっと貸して貰えますか？」
俺の持っていた本を受け取ると、彼女はページをパラパラと捲り、あるページに栞を置いた。
「とりあえず次回までに、そのページまで読んできてください。」
「え…、読んできてって言われても…。」
「辞書ありますよね？解らない漢字は辞書で調べてくださいね。」
そう言って彼女はにっこりと笑った。

楓<後編>

彼女と俺だけの野外授業が始まった。
宿題を出されるなんて予想外だったが、彼女にこれ以上格好悪いところは見せられないと、俺はガラにもなく頑張ってしまった。
彼女から借りた小説は、感情移入するどころかただ文章を解読する為だけのものとなっている。本来の意味を成してはいないが、彼女との間を繋ぐアイテムという意味で、俺にとって不可欠なものとなっていた。
そして今日もバイト帰りに公園へと急ぐ。
いつもと違うことと言ったら、その不可欠なアイテムを持っているということ。
なんだか妙に胸が踊って、猛スピードで自転車を漕いで公園に入った。
彼女は既に来ていて、いつものベンチに座っている。しかし手にはいつも持っていた本はなくて、ただボーッと何かを眺めている様だった。
「何見てるの？」
挨拶もせずに声を掛けると、彼女は驚いたように俺に顔向け、それから安心したかのような笑顔を見せた。
「こんにちは。」
「ちわ。…で、何見てたの？」
「紅葉を。」
彼女は再び、先程と同じ場所に視線を向けた。
「大分色付きましたね。」
彼女の視線に促されて、俺も今彼女が見ているであろう場所に目を向けた。
確かに先週よりも葉は紅く染まり、元の色を感じさせないようになっていた。

「紅葉、好きなんです。この紅く染まった葉っぱが物凄く綺麗で。見ていると何だか懐かしいような切ないような…。それでいて温かい気持ちになるんです。」

今まで紅葉なんて、ただ秋を告げるものでしかないと思っていた。しかし、彼女の穏やかに語られる言葉を聞いているうちに、それがとても美しいもののように思えてきた。

暫くの間お互い何も話さずに、紅く色付いた紅葉をただただ眺めていた。

どれくらい時間が経ったのか、
「そろそろ始めましょうか。」
という彼女の声に、はっと我に返った。
「読んできましたか？」
「一応。」
本を取り出しページを開くと
「じゃあ、声に出して読んでみてください。」
と彼女が言った。
「ここで？」
「はい。」
この前と同じ満面の笑みに返す言葉を無くし、渋々文章を読みだす。一週間真面目に頑張った甲斐があり、たどたどしくはあるがちゃんと漢字は読めている。彼女は微笑みながら、俺の読む文章を聞いていた。
「ちゃんと勉強してきたんですね。」
「まあね。」
無愛想に答える俺に
「じゃあこの文章のなかから読み取れる、主人公の感情を言ってみてください。」

と、彼女から次の課題が出された。
漢字を読むことだけに重点を置いていた俺がそんなことを答えられる筈がない。
慌てて最初のページから読み返していると、彼女は呆れた顔をする訳でもなく、俺に近寄り解説し始めた。
「この文章は、ここが…。」
顔が近い。
俺はかなり近くに彼女の顔があることに、嬉しさと動揺が入り交じったような胸の高鳴りを感じ、彼女の声を聞く余裕を失っていた。
彼女の綺麗な肌。長い睫毛。ゆっくりと動く唇。それらから目が離せない。

―彼女に触れたい―

ふと彼女が顔を上げた。
あまりに急なことに俺は視線を逸らすことを忘れ、彼女と見つめ合うかたちになってしまった。
先に視線を逸らしたのは彼女だった。
「どうか…したんですか？」
その声が少し震えているような気がして、俺は彼女に対する欲求を辛うじて止めた。
俺の事を恐がっているのか？
わからない。
わからないけど、ここで不用意な事を言うわけにはいかない。
「…教えるの、上手いなと思って。」
彼女の説明などほとんど聞いていなかった俺の言葉。はっきり言っ

てしまえば“嘘”なのに、彼女の表情が笑顔へと変わった。
「本当ですか？」
「ああ…。」
「実は私、昔、先生になるのが夢だったんです。」
嬉しそうな彼女を見て、胸が痛んだ。今更“適当なことを言った”とは言えない。
彼女の笑顔に反比例して、胸の中にどんどんと罪悪感が広がっていき、それは反省へと姿を変えた。

それから俺は、真面目に彼女の“授業”を受けるようになった。そりゃ、彼女に見とれることも何度かあったけど、以前に比べればマシな方だ。
彼女が楽しそうに勉強を教える。
それを見ている俺もなんだか嬉しくなる。
こんな二人だけの時間がずっと続けばいいのに。
心からそう思った。

いつもならバイトが終わるとすぐに公園に向かう俺だが、今日は店から出る瞬間に掛かってきた先輩からの電話のお陰で、駅に行く羽目になってしまった。
「悪いけど、定期券忘れて来たから駅まで持ってきて。」
と、先輩は用件だけ言い電話を切った。
普段より早く仕事が終わったので、駅に寄っても公園に着く時間はいつもと大して変わらないだろうが、早く終わった分彼女と長く居られると喜んでいたので、この急な用事にやけに苛つく。しかし、先輩にはいつも世話になっているので断ることも出来ず、公園に行くには遠回りになってしまうその道程を、ため息をつきながら自転

車を飛ばした。
駅に着き、先輩の姿を探す。そんなに大きくない駅なのですぐに見つかると思っていたが、日曜日の夕方は流石に人も多くてなかなか見つけることが出来ない。
こんなところで時間をロスしている場合じゃない。
先輩の居場所を確認しようと携帯電話を取り出した時だった。

「友哉君？」

聞き覚えのある女の人の声に、手を止めて振り返る。
そこには、笑顔で立っている彼女がいた。
「やっぱりそうだ。珍しいですね、こんなところで会うなんて。」
「…ホントに。」
予想外のことに、心臓が大きく速く鼓動する。
偶然とはいえ、こんなところで会えるなんて。さっきまでの苛つきが消え、現金にも先輩への感謝の気持ちすら芽生えて来た。
「何処か行ってきたんですか？」
「いや、ちょっと用事があって…。そっちこそ何処か行ってきたの？」
「私は…」

「めぐみ。」
背後から、彼女を呼ぶ知らない声が聞こえた。
その声の方向に目を向けると、大きめの荷物を持って彼女に足早に近づいてくる男の姿があった。
「ごめん、待たせて。」
「ううん、大丈夫。それよりいつもの特急の席空いてた？」
「ああ。なんとか空いてたよ。」
俺をそっちのけでその男と話し始めた彼女の言葉は、俺の時とは違

いタメ口で。
しかもその顔は、俺が見たことのないような幸せそうな笑顔を浮かべていた。
それだけで俺は、その男が誰なのか、わかってしまった。そして、彼女が公園に来る時間の意味も。

「知り合い？」
俺に気付き、そいつが彼女に尋ねる。
「うん。この前話したでしょ、公園の…。」
「ああ。」
彼は俺に顔を向けると、笑顔で言った。
「初めまして。めぐみがいつも世話になってるみたいで。」
その余裕そうな態度と言葉に、俺は頭の中が熱くなった。
怒りに似た苛立ちと、悔しさが、瞬時に沸き上がる。
「友哉君、紹介しますね。彼は…」

聞きたくない！

この男が誰なのかは、もうわかっている。
でも彼女の口から聞かされるのがどうしても嫌で、耳を塞ぎたい衝動に駆られた。

その時、俺の気持ちを悟ったかの様に、都合良く携帯がなった。
先輩からの電話だ。
「俺、もう行かなきゃいけないから。」
彼女の言葉を最後まで聞くことをせず、俺は二人に背を向けた。
「じゃあ、また公園で。」
何も気付いていない彼女の穏やかな声。
その声が今はとても残酷なものに感じる。
立ち止まり、平然を装い振り返るが、どうしても彼女の顔を見るこ

とは出来なかった。
「…今日は無理だから。つーか、暫く行くかどうかわかんねえから。」
それだけ告げ、俺は足早にその場を去った。

彼女と駅で会ってから二週間が経つ。
先週の日曜日も、どうしても彼女に会う気になれず、公園に近寄ることが出来なかった。
二週間ずっと考えた。正直忘れてしまいたいとも思った。でも忘れられなかった。
やがて心に沸き上がってきたある“想い”。それを胸に、やや躊躇しながら公園に足を踏み入れた。
先に来ていた彼女が、俺に気付く。
「こんにちは。」
僅かに間があった後、安堵したような笑顔を浮かべて挨拶をする彼女。そして軽く視線を落とし、呟く。
「もう来ないかと思ってました。」
俺は無言のまま、彼女の隣に腰を降ろした。

この間まで美しく色づいていた紅葉は大分散っていて、間もなく冬がくることを告げていた。かなり冷たくてなった風に、俺は思わず身震いする。
「冷めてるかもしれませんが、もし良かったらどうぞ。」
彼女がまだほんのりと温かい缶コーヒーを手渡してきた。
「そっちが飲めばいいよ。」
「私はさっき飲みましたから。」
俺の為に買っておいてくれたのだろうか。もしかしたら今日も来なかったかもしれないのに。

「来てくれてよかったです。」

「…会いたかったから。」

「え？」

「あの…、ほら、小説もまだ途中だし、途中でやめるのもなんか気分悪いじゃん。」

思わず口に出してしまった言葉を誤魔化すように、俺は次の言葉を瞬時に探して早口で喋りだした。でもそれは、全くの嘘という訳ではなかった。

そう。

今はまだ“勉強を教えてもらってる”、その関係でもいい。どんな関係でも、こうして二人だけで会えれば。

その間の彼女が見せている一つ一つの表情は、あの男も知らない。

俺だけが知っている、俺だけのものだから。

今はまだ、それだけでいい。でも、そのうちきっと…。

「そうです…ね。」

彼女が微笑んだ。

「じゃあ、早速始めましょうか。」

彼女の笑顔が何だか寂しげに見えた。しかし授業が進んでいくうちに、俺はそんなことすっかり忘れていた。

寒さはどんどん増してきて、日もかなりの早さで暮れていく。街灯が点っても暫く授業は続いたが、さすがに寒さに耐え切れられなくなり、いつもより早く切り上げようということになった。

「じゃあ、次はここまで読んできてくださいね。」

彼女がページを指定し、俺に示す。

薄暗い灯りの中、彼女の小さな手だけが、俺の目に入っていた。

「栞…。」

「…え？」

「栞貸してもらっていいですか？」
本に挟んであったはずの栞がないことを知り周りを探すが、辺りが暗い所為かそれを見つけることが出来ない。
彼女は少し悩んだ後、足元から何かを拾い上げた。
「これを栞の代わりにしましょうか。」
それは紅く染まった紅葉の葉だった。
彼女の白く浮かびあがった手と、紅く染まった紅葉のコントラストが綺麗で、再び目を奪われる。

紅葉を本の上に置いたところで、彼女の動きが止まった。
不思議に思い、彼女の顔に視線を移す。
その表情は、何かを考えているようで、そして、なんとなく寂しげで…。
「…どうかしたの？」
戸惑いながらも、彼女に声を掛けた。
彼女の視線が、ゆっくりと、本から俺に移る。
「…実は…、私、引っ越すことが決まっていて…。ここにくるのも、来週で最後になると思います。」

彼女の引っ越しの理由は、あの男の所に行くから、という事だった。
それは恐らく“結婚”を意味している―。

俺は馬鹿だ。
“いつか”なんて、それは叶うはずのない夢だったのに。そんな事にも気付かずに浮かれていたなんて、本当に馬鹿だ。
俺が出会うよりもずっと前から流れていた二人の時間を、たった四ヶ月程度で覆すことなど、到底できる訳なかったんだ。
彼女の中では俺なんて、ただの“勉強が苦手な高校生”。そして、もう、“それ以上”になることはあり得ないんだ。

―来週が過ぎたら、きっともう二度と会えない。俺の気持ちに気付くこともなく、彼女は行ってしまう。

俺は自分の部屋に戻り、倒れるように枕に顔を埋めた。
頭の中で悔しさや悲しみや焦りや、自己嫌悪、それから彼女を好きだという想いや、様々な感情が一気に溢れだしてきて、ぐちゃぐちゃになって。
どうすればいいのかわからなかった。
この行き場のない気持ちをどうすればいいのか。
そして、もうすぐいなくなってしまう彼女に、何をすればいいのか。
いっそ“行かないでくれ”と言えたら、楽なのかもしれない。でもそれを言ったとしても、きっと彼女を困らせるだけだろう。寧ろ只の子供の我儘に聞こえてしまうかもしれない。
じゃあ、どうしたら。
どうしたらいいんだ…。

彼女と会う最後の日曜日。
いつもと同じ時間。
いつもと同じ場所。
彼女がいつものように待っている。
いつもと同じように挨拶を交わしてベンチに座り、本を開き授業が始まる。
でも…。
こんな時間も今日が最後。
授業を聞くふりをしながら、彼女の声を、顔を、香りを胸に焼き付ける。
一生懸命説明をする彼女の横顔はとても綺麗で、もうこうして見つめることも出来ないかと思うと胸が苦しくなって、下を向いた。

時間は刻々と過ぎていき、街灯に明かりが点る。
冷たくなった手を暖めるように、彼女が息を吐いた。
「…そろそろ、帰りましょうか。」
躊躇うような彼女の声。
俺は着ていたジャケットの襟元を片手で手繰り寄せながら、何も言わず地面を見つめた。
「この本、結局最後まで読めませんでしたね。でも、続き、一人でも読んでみてくださいね。」
そう言って彼女が、俺の膝に本を置く。
「…いいよ。そっちの物なんだし、持って帰れば。」
置かれた本を持ち上げて渡そうとしたが、彼女はゆっくりと首を振った。
「いえ、私はもう読んだので。それから、これ…。」
隣に置いてあった鞄からもう一冊本を取出して、俺に差し出した。
「友哉君が最初に拾ってくれたのと同じ本です。その本を読み終えたら読んでみてください。」
俺は黙ってそれを受け取った。

もう本当に最後なのに、言葉が出て来ない。
言いたいことは沢山あるのに。それから、言うべきであろう言葉も。

「…では、そろそろ行きますね。」
彼女が立ち上がった。
俯いたままの俺には、彼女が今どんな表情をしているのかもわからない。
彼女は暫くその場に立っていたが、俺が何も言わないと諦めたのか、
「さようなら。お元気で。」
と告げて、歩きだした。
彼女が行ってしまう。

早く…。
早く何か言わなければ。

「…めぐみさん！」
俺は立ち上がり、大きな声で彼女の名前を呼んだ。
あの男のように呼び捨てには出来ないけれど、いつか口にしてみたかった彼女の名前を。
彼女が立ち止まり、振り返る。
「初めて名前呼んでくれましたね。」
その表情は、なんだか今にも泣き出しそうな、笑顔だった。
「あ…。」
胸が苦しくて、声が擦れる。
何か言わなければいけないのに、言葉にならない。

冷たい風が、俺を急かす様に吹き付ける。
「あの…。」
やっとの思いで声を出す。
「―今まで、楽しかった。」

「私も。楽しかったです。」
俺の言葉を聞くと彼女はそう言い、小さく手を振って、今度こそ公園を出て行った。

「…はは、馬鹿か俺は。」
彼女の姿が見えなくなると、俺は脱力したかの様にベンチに座り込んだ。
「…楽しかったって、子供じゃあるまいし…。」
もっと他に言いたい言葉は沢山あったのに、出てきた言葉がそれな

んて…。自分が情けなくなった。
彼女から貰った二冊の本に目を移す。
彼女がいなければ何の意味もないその本のページをパラパラと捲ると、間に封筒が挟まっているのに気が付いた。
開けてみると、それは彼女からの手紙だった。

『友哉君へ
こんな風に中途半端なままいなくなってしまってごめんなさい。
本当は最後まで、あの本が終わるまで、一緒に勉強したかったのですが、結婚することはかなり前から決まっていて、この様な形でお別れすることになってしまいました。
初めて友哉君と会った時は、なんだか怖い印象を持っていたのに、勉強を始めたら一生懸命聞いてくれて、とても嬉しかった。
以前、先生になるのが夢だったと、話したことがありましたよね。
自分の性格では教師になるなんて無理だと思い、その夢は諦めました。でも、友哉君のお陰で、少しだけど、その夢を叶えることが出来ました。
友哉君が公園に来なくなった時、やっぱり私じゃ駄目なんだと思って切なくなったけど、あの時“会いたかったから”って言って貰えて、こんな自分が教える勉強でも喜んで貰えたんだって、凄く嬉しかったんです。ありがとう。』

「…好きでもない女に“会いたい”なんて言うかよ。」
俺は手紙に向かって呟いた。
結局彼女の中では、俺は“生徒”でしかなかったんだ。
わかっていた事なのに―。

目頭が熱くなった。
まだ手紙は続いていたが、目の前が歪んで、読むことが出来なかった。

あれから間もなく一年が経とうとしている。
彼女が来なくなって以来訪れることもなくなったあの公園に、俺は久しぶりに足を踏み入れていた。
あの頃と同じようにベンチに座り、紅く色付いた紅葉を眺める。

俺は高校三年になっていて、間もなく受験の季節を向かえようとしていた。
あの頃はこの先どうしたいかなんて考えてなどいなかった自分が、今は大学に入る為に猛勉強をしているなんて、なんだか不思議に感じる。
夢も何もなかった俺。
そんな俺が彼女が諦めた“教師”という職業を目指してみようかなんて考えていると知ったら、彼女はどんな顔をするだろうか…。
もうそれを確かめる術はないけれど―。

俺は彼女の手紙に書かれていた最後の文を思い出した。

『友哉君なら、きっとどんなことでもやり遂げられると思います。
離れていても、ずっと応援してます。』

「寒っ。」
急に冷たい風が吹いてきて、身震いする。
紅葉がザアっと音を立てて舞上がった。

「そろそろ帰って勉強するか。」
俺はベンチから立ち上がると、彼女の最後のメッセージを胸に、歩

きだした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4454d/

それぞれの季節

2010年12月29日14時45分発行